

疑問形式を用いた非難文について
- いわゆる「何を文句を言ってるの」文についての考察 -

いわさき なつみ
岩崎奈津美

1. 問題提起

日本語において、一文の中に二つの「ヲ格」が出現することは避けられる傾向にある。しかし、一部の例ではこの制限にとらわれない表現がある。以下の文を見てみたい。

(1) 何を文句を言ってるの！ (天野(2011)(1))

こうした事例は Konno(2004)や天野(2011)、高見(2010)などで考察されている。本論文はこのような一文の中で二重にヲ格を用いるもの、また本来ヲ格を必要としない自動詞文にヲ格が接続しているもの(例:何を走っているの)で、従来主に咎めの意味があるとして指摘されてきた文について考察する。発表者はこの文を「余剰ヲ格文」と呼ぶ。従来この表現は非難や咎めを表すと指摘されてきた。しかし、余剰ヲ格文は他の意味も表せるのではないかという点が発表者の関心である。例(2)は、家族で夕食を取っているアニメの一場面だ。中学生の弟の表情を見た高校生の姉による発話である。

(2) みかん: ユズったら何そんな幸せそうな顔してんの。 【あたしンち】

上の例において、家族との食事を嬉しそうに食べる相手を咎める理由はないはずである。またこの場面での姉の表情は、相手に疑問を持っているようではあるが、相手を非難している様子はない。意味は文脈に依存するため、ある一つの表現が複数の意味を持つことも考えられる。こうした例を通して、余剰ヲ格文の非難以外の用法を探りたい。またヲ格を一つだけ用いる典型的な疑問文(例:何を言っているの)でも状況によっては疑問以外の意味を表現できることから、余剰ヲ格文と典型疑問文との関係性を考察した。

2. 先行研究

天野(2011)は当該表現を「逸脱的な何ヲ文」と呼び、一文に一度のヲ格が出現する文との相違点、関係性を分析した。例(3)は一文に一度のヲ格を用いる典型的な疑問文である。

(3) (早く支度をして家を出なければならないときに、何かを読んでゆっくりしている B を見て、A が発話)
 A: 何を読んでいるの！ (天野(2011)(9))

天野は例(3)のような文が状況によっては咎めに聞こえるのはあくまでも語用論的な暗意の範囲であると論じた。その論拠として、(3)は聞き手が疑問詞「何を」にあたるものを回答することも可能であると言及している。対して考察対象である余剰ヲ格文は、行為全体に対して疑念を表し非難を表明していると考察した。

高見(2010)は統語的観点から考察した先行研究に反例を挙げ、語用論的観点からの考察を試みた。その結果、当該表現に以下の通り意味的・機能的制約があると結論付けた。

- (4)「何を文句を言ってるの」構文に課される意味的・機能的制約：「何を文句を言ってるの」構文は、話し手が、その文の主語がXをすべきでない、Xでないはずだと考えていたのに対し、Xである(一時点での)状況に接して驚いたり不審に思っ、(聞き手に)「どうしてXなのか」と反語的に言い、疑念や叱責、苛立ち等の意味を表す場合に適格となる。
(高見(2010)(26))

3. 考察

資料には、映画・ドラマ・バラエティー・アニメ・ドキュメンタリー番組から該当する発話104件を抜粋し用いる。考察対象は、一文で二重にヲ格が使われている文(例:何を文句を言っているの)ⁱ、また、復元すると二重にヲ格がついても問題ないと判断された文(例:何文句言っているの)、そして何を+自動詞の文(例:何(を)泣いているの)である。

3.1 用法

発表者は余剰ヲ格文の用法を分類する際、<質問・非難・励まし>の三種類に区分した。

A 質問：話者にとって不足の情報があり、それを知りたいと思っている。質問の用法は、単純な回答要求から、回答要求+不信感の表明まで、話者の意図は幅広い。ここには明確な境界線があるわけではなくグラデーションのようになっている。例(5)は幼い友人に対して泣いている理由を問う単純な質問で、イントネーションも上昇調になっている。例(6)も同様、もめている理由を知りたいために質問をしている。しかし例(5)に比べれば、大の大人が言い争っている様子を見た話者には少しの懐疑的な気持ちが混ざっている。

- (5) (目の前に現れた犬が怖いと言って道端で大泣きする博士(博士は8歳の女の子))

ゆっこ:あれー博士、何泣いてんの、迷子。

博士:ゆっこだ。

【日常】

- (6) (オフィスで上司2人がもめている)

あすか:あの一何もめてるんですか。

田島部長:小田原君がね、明日の忘年会の幹事やりたくないって。 【夢を叶えるゾウ】

B 非難：話者にとって情報は不足していない。しかし聞き手の行動が社会的常識に違反している、あるいは話者にとって実害がある。またはそのいずれでなくとも、話者にとって聞き手の行動が到底理解できない。ただし、こうした表現は相手を心から非難しているものもあれば、その程度のかかなり弱いものもある。例(7)は「バレている」内容は双方に明らかであり、聞き手も謝罪していることから話者に非難の意図があることがわかる。この表現は、例(8)や例(9)のように友人関係などで使用される際はかなり弱い非難となり、相手の言動に対して所謂「ツッコみ」を入れているような例がある。

- (7) (蝶子と春田が黒澤を尾行していたが、春田が黒澤に見つかってしまった)

((7)はSMSのやりとりのため記号はそのまま記述)

蝶子:何、バレてんの？

春田:申し訳ございません！

【おっさんずラブ】

(8) (店のドアに顔を挟んで遊んでいる春田(店主と春田は友人関係))

居酒屋の店主:何ふざけてんだお前。

(春田は終始にやにやしている)

【おっさんずラブ】

(9) (浮かない顔をしている友人まっつんに対して)

源:何お前干からびたカシューナッツみてえな顔してんだよ。

まっつん:ごめん。

【ガキ☆ロック】

C 励まし：聞き手の行動は社会的常識に反しておらず、非難するほどの要素はない。話者にとって情報の不足があるか否かは文脈による。例(10)は話者の居合わせている場所が旧友の葬式であることから、聞き手が泣いている理由はある程度理解ができている。一方例(11)は聞き手が落ち込んでいる(ように話者には見えている)以外の情報がなく、落ち込んでいる理由を問いながら励ましの意味も表しているものと思われる。

(10)(旧友の葬式にて、友人の奈々が突然姿を現す)

奈々:何泣いてんの。笑おう。あの頃みたいに。

(一同が笑みを見せる)

【SUNNY】

(11) (みんなが器用に木に登るなか、一匹だけ木に登ることができずにいるマリカ)

(登場しているのはすべてオランウータンで、人間のアテレコが入っている)

ムムート:何落ち込んでるんだ。

マリカ:私全然木に登れないの。私のことは放っておいて。 【ジャングルスクール】

以上のように、話者が余剰ヲ格文を発話する際には、非難以外の意味も伝えられることが分かった。では、こうした話者の意図を総括できる余剰ヲ格文の本質的な意味はどこにあるのか。発表者は以下の仮説を立てた。

余剰ヲ格文の本質的な意味:双方にとって言うまでもない相手の目の前の行動を取って言語化することで、会話参加者の間で当該の行動が共有の知識であるということを前景化させる。しかし相手の行動に(見えているにも関わらず)言及するということは、そこに話者の何らかの意図があるということを含意する。ここで二次的な意味<質問・非難・励まし>が生じる。

このように本質的な意味を設定することで、発話が伝達された際に場面や文脈で話者の意図が変化することも説明が可能になる。また相互の二次的な意味には明確な境界線があるわけではない。今回は代表的な二次的な意味として三つを挙げたが、話者の意図はこれよりも多種多様である可能性を否定できず、さらなる検討の余地があるだろう。

3.2 中間表現について

天野(2011)は余剰ヲ格文の位置づけを典型疑問文の二つの解釈という観点から見出した。例(12)は典型的な疑問文が暗意として非難を示す例である。天野によれば、この例には二つの解釈があるという。一つは上記の通り疑問文が暗意の範囲で非難を示すものである。もう一つは「どのようなものであれ何かを読んでいるという行為全体に関して疑念を表し非難を表明する」もの

である。後者の解釈に従う場合、例(12)は「何を【本を】読んでるの」と対象を顕在化させることもでき(天野 2011)、これが本稿で言う余剰ヲ格文にあたる。つまり形式的にも典型的な疑問文と余剰ヲ格文は無関係ではないというのが天野の主張であると思われる。

(12)(早く支度をして家を出なければならないときに、何かを読んでゆっくりしている B を見て、A が発話)

A:何を読んでいるの！

(天野(2011)(9):(3)再掲)

本稿も典型的な疑問文と余剰ヲ格文は決して無関係ではないという立場をとる。しかし発表者は、この二つの境界線は曖昧であると考え、その間にあるものを「中間表現」と位置付ける。資料を観察する中で、実例において余剰ヲ格文は作例ほどはっきりとした形式で表れないということがわかった。これには<表層の統語情報の不足>と<聞き手の反応>という二つの観点がある。まずは<表層の統語情報の不足>という問題について考えたい。これには三つの問題がある。

一つ目に、例(13)を参考に余剰ヲ格文におけるヲ格の問題について考えたい。

(13)(車を運転中、急いでいるにも関わらず赤信号になってしまった)

さつき:何邪魔してんだよ。

【テセウスの船】

「邪魔」という言葉は「邪魔する」「邪魔をする」と二つの表現がある。これは加藤(2006)で分離動詞と呼ばれているものである。加藤(2006)は動詞について①「X する」のみの形を持つもの(例:死去する)、②「X する」と「X をする」のいずれも用いるもの(例:練習(を)する)、③「X(X が動作動詞でない)をする」のみの形を持つもの(例:ケガをする)の三種に分類している。しかし加藤も言及しているように、③タイプは助詞の脱落が見られるため、②タイプとの区別が難しい。また②タイプはヲ格の挿入が自由である。こうした動詞の特徴から、使用される動詞によっては余剰ヲ格文か否かの判断が難しくなる。

二つ目の問題として、同じ助詞である二格の問題について考えたい。例(14)を見てみよう。

(14)(他人の傘に自分の名前を刺繍する母)

みかん:何名前刺繍してんの。

【あたしンち】

この場合、「何」と「名前」の間には二格を挿入することができる。その場合、仮に話者の意図が聞き手への非難だったとしても、これは典型疑問文の範囲である。しかし同時にこの場所にはヲ格も挿入可能であり、この場合は余剰ヲ格文となる(「刺繍」の後にヲ格を挿入することもできるため、三重ヲ格になる可能性もある)。一方で、以下パターン B のように、動詞によっては「何」の直後は確実にヲ格しか挿入できないものもある。ここから、発話によっては、典型疑問文なのか余剰ヲ格文なのか判別が困難なことがあるということがわかる。

<ヲ格が二重に挿入可能なパターン>

A(15)何名前刺繍してんの

【あたしンち(=14)】

→何{に/を}名前刺繍してんの→典型疑問文・余剰ヲ格文いずれの解釈も可能

B(16)何お供え物食ってんのよ

【浦安鉄筋家族】

→何{に*/を}お供え物食ってんのよ→余剰ヲ格文のみの解釈が可能

<自動詞にヲ格が接続されるパターン>

A(17)何ビビってんの

【鬼嫁日記】

→何{に/を}ビビってんの→典型疑問文・余剰ヲ格いずれの解釈も可能

B(18)何犬なんかにビビってんだよ

【日常】

→何{に*/を}犬なんかにビビってんだよ→余剰ヲ格文のみの解釈が可能

この問題は実際の資料を観察すると浮彫りになる。発表者の手持ちの資料 104 件のうち、「何」の直後にヲ格が顕在化していた例はわずか 7 件で、全体の 7% に満たない。また目的語の後のヲ格を顕在化させ、二重にヲ格になっていた例はうち 1 件である。

三つ目の問題に、動詞の自他と余剰ヲ格文の関係性という問題がある。「生きる」という動詞を例に考えたい。「生きる」は辞書によると自動詞に分類されるが(新村出編『広辞苑』第七版)、「今を生きる」「人生を生きる」などヲ格との接続が可能な動詞であるⁱⁱ。資料において「何生きてんだよ」という例が挙げたが、「今を生きてるんだよ」といった返答が予測可能であるため、発表者はこれを考察対象に入れなかった。このように自他の区別だけでは余剰ヲ格文か否かの判断がしきれない場面があり、典型疑問文との境界線が曖昧であることがわかるだろう。

次に<聞き手の反応>という観点から例文(19)について考えてみたい。

(19) (買い物で浪費せずに済むルートを考えるみさえとひろしに対して)

しんのすけ:何ふたりでこそそそしてんの。

みさえ:しんちゃんが楽しめるところを考えてるのよ。

【クレヨンしんちゃん】

(19)の映像において、話者であるしんのすけの表情はかなり苛立っているように見え、発話も下降調である。ここから、話者はこそそそしているのが何であるかを問うよりも、相手を非難しているという意味合いが強いように思われる。「こそそそする」は自動詞であり、「何」という疑問詞に対応した情報を補填することはできないため余剰ヲ格文となる。しかしここでの返答は「楽しめるところを考えている」とあり、典型疑問文「何をしているの」に対応する回答と同じである。聞き手の認識として、余剰ヲ格文が非難を表すのは、典型疑問文が暗に非難を表す場合と変わらないのではないかと考えられる。

以上の観点から、典型疑問文と余剰ヲ格文は完全に分離することはできないものと考えられる。発表者はこうして曖昧な位置にあるものを「中間表現」と分類する。余剰ヲ格文は典型疑問文の延長線上にあるもので、別物ではない。また機能的にも、典型疑問文が文脈によって単純な質問から非難を表すのと同じように、中間表現や余剰ヲ格文もその派生的意味は文脈に依存する。

典型疑問文-----	中間表現-----	余剰ヲ格文
何を言っているの	何邪魔しているの	何を文句を言っているの
	何ビビってんの	
	何生きてんの 等	

4. まとめと課題

発表者は、余剰ヲ格文の本質的意味を設定することで表現が複数の二次的意味になるという現象を説明可能にした。また形式的にも意味的にも、余剰ヲ格文は典型疑問文と連続的であると考察した。最後に、以下にこれからの課題を述べる。

まず、余剰ヲ格文の用法として非難以外の意味もあると述べたが、実例のほとんどは先行研究

の考察通り人を咎め非難する場合に用いられていた。こうした使われ方の偏りについて考える必要があるだろう。また、二次的な意味の中心が非難なのはなぜかという点も検討が必要だ。

次に、「何を」という言葉の位置づけである。高見(2010)は「何を」が付加詞的であると捉えるのに対し、天野(2011)はこれを対象の機能を持つ対格だと結論付けた。また天野はこの「何を」によって表現に行動主の意図性が引き出されるとしている。「何を」がどのような位置づけにあるかという問題は重要であるにも関わらず、本稿では触れなかった。こうした点を次の課題とし、今後より多くの事例と共に考察したい。

i 資料の中に「何をバカなことを…」という二重にヲ格の表れた例があった。3.2 節にあるように、一文の中に二度のヲ格が顕在化する例は珍しいが、対応する動詞が出現しなかったため考察対象から外した。

ii 『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』アプリケーション「中納言」にて書字形出現形「を」後方共起「生きる」と検索すると 334 件の例が見つかった。多くは「現代を生きる」「今を生きる」など時間に関する名詞に接続するものであったが、「人生を生きる」「苦しみを生きる」なども見受けられた。問題はこうした表現のヲ格の意味役割が何であるかということだ。この疑問は、4 節で述べた余剰ヲ格文の「何を」がどのような役割なのかという問題につながるだろう。この疑問を通して、「何を」の位置づけが聞き手の返答のもとに見出されるのではないかという期待が生まれた。今後の課題としたい。

参考文献

天野みどり(2008)「拡張他動詞文－「何を文句を言ってるの」－」『日本語文法』8 巻 1 号
くろしお出版 pp.3-19.

天野みどり(2011)『日本語構文の意味と類推拡張』佐久間書院

加藤重広(2006)「二重ヲ格制約論」『北海道大学文学研究科紀要』119 pp.19-41.

Kurafuji, Takeo 1996. Unambiguous Checking. *MIT Working Papers in Linguistics* 29 :81.-96.

Konno, Hiroaki 2004. The Nani-oX-o Construction. *Tsukuba English Studies* 23 :1.-25.

高見健一(2010)「「何を文句を言ってるの」構文の適格性条件」『日本語文法』10 巻
1 号 くろしお出版 pp.3-19.

馬穎瑞(2017)「日本語疑問文の統語語用論的研究」北海道大学文学研究科 博士論文

用例

「鬼嫁日記いい湯だな」(2007)フジテレビ／「おっさんずラブ」シーズン 1(2018)テレビ朝日／
「ガキ☆ロック - 浅草六区人情物語 - 」(2017-現在)amazon プライムビデオ／「浦安鉄筋家族」
(2020) テレビ東京／「テセウスの船」(2020)TBS テレビ／「クレヨンしんちゃん」テレビ朝
日／「あたしんち」テレビ朝日／「日常」*複数局で放送／「SUNNY 強い気持ち・強い愛」
(2018)／「ジャングルスクール」NHK データ収集にその他 34 作品

*過去の作品は動画配信サイトで視聴

使用データ

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』検索アプリケーション『中納言』

(最終閲覧日: 2021 年 3 月 25 日) <https://chunagon.ninjal.ac.jp/auth/login>